

【大船渡市】

1人1台端末の利活用に係る計画

1 1人1台端末を始めとするICT環境によって実現を目指す学びの姿

当市学校教育方針の目標は、「主体的に判断し、たくましく生き抜く子どもの育成」であり、学校教育の目指す姿を「確かな学力とともに、命を大切にし、他人を思いやる豊かな心と健やかな体を身に付けること」としている。

この目標を達成するため、1人1台端末を始めとするICT環境のもとで個別最適な学びと協働的な学びによって主体的・対話的で深い学びの実現を目指す。

日々の授業の中では、情報端末を最大限に活用することで、学習の基盤となる「情報活用能力」を育み、自分の学習状況を理解して最適な学習を選択し、他者と協働しながら問題を発見して解決に向かうことができる児童生徒を育成する。

2 GIGA第1期の総括

(1) 成果

本市は、下表のとおりICT教育環境の充実、ICT教育の推進に取り組んできた。

年度	主な学習環境の整備	利活用の推進
R 2	校内LANを整備	
R 3	1人1台端末を整備 ロイロノート・スクール導入	ICT活用研修会
R 4	電子黒板整備 AIドリルを導入 指導者用デジタル教科書拡充 学習者用デジタル教科書実証事業を実施 無線LANプリンタ, AP追加, 可動式ルーター整備 タブレット用ヘッドセット, タッチペン整備 学習eポータル「L-Gate」を整備	タブレットルール制定 「大船渡市 情報活用能力体系表」作成 学力向上研究委員会(ICT推進班)の活動
R 5	ICT支援員の配置	プログラミング的思考を育成(マイクロビット, pepper プログラミングチャレンジ, telloプログラミング体験学習)
R 6	校務支援システム導入	タブレットルール改訂

1人1台端末導入当初は、全学年共通して、まずはタブレットに慣れるために、ログイン・キー入力を練習した。

また、調べ活動のためyahoo!きっずを活用したり、教科書のQRコードを読み取って、関連動画を視聴・理解を深めるためNHKforschoolを使って動画を視聴したり、そのほか、アンケートやテストの分析、ロイロノート・スクール(クラウド型授業支援アプリ)の活用をするなどした。

ア 教科別の主な活用取り組み例

(ア) 国語

- ・教科書のQRコードを読み取り、関連動画や詩の朗読を視聴
- ・Wordによる「ローマ字」の学習(五十音を入力してローマ字を習得)
- ・ロイロノートの録音機能(詩の音読を録音し、自分の音読の仕方を振り返学習)
- ・ポスターの良さの探究(ロイロノートでポスターの写真に書き込みと共有)

(イ) 算数

- ・ロイロノートのカメラによる形の学習（身近な物の形の撮影、全体共有）
- ・電卓機能の使用
- ・算数公式をロイロノートに入力し、教員用タブレットに提出
- ・プログラミング学習（プログルやスクラッチを活用、三の倍数で猫の鳴き声をプログラム）

(ウ) 音楽

- ・オーケストラ学習(ロイロノートのシンキングツールによる楽器の響き方の整理、共有)
- ・自分の歌声を録音録画し、客観的視点で観察後、評価に活用
- ・歌詞カードを画像で送信、ペーパーレス化
- ・ロイロノートで自分が作曲したメロディーを演奏した動画を提出し、クラス内で鑑賞

(エ) 外国語

- ・ALTの発音を各自で録音し、発音練習に活用

(オ) 道徳

- ・自分の意見を記入したプリントをカメラで撮影し、ロイロノートの提出箱により共有

イ 授業以外での活用状況

(ア) 小中学校共通

- ・Teamsによるオンライン研修会に参加
- ・授業後に、カメラを活用し各自黒板を撮影
- ・ロイロノートを使い、係活動、委員会活動でアンケートの実施
- ・PowerPointを使った自由研究

(イ) 小学校

- ・特別支援学級でロイロノートを用いてメッセージのやりとり
- ・操作に慣れるため、休み時間にゲーム等を活用
- ・給食時間の様子を録画し、食べる姿勢について確認
- ・生活リズムの崩れや児童等への保健指導

(ウ) 中学校

- ・執行部や各委員会の活動の共有にむけロイロノートで横断的な取り組みの模索

以上の取り組みの結果、多くの児童生徒がタブレットが学習の役に立つものだと考えるようになり、タブレットを活用することにより、自分なりに資料を調べるなど一人一人の理解や関心にあった学習を進める習慣が着実に身についてきた。

(2) 課題と解決策

一方で、以下のような課題も明らかとなったため、それぞれについて解決策を整理する。

ア（課題） タブレット端末等の活用頻度や探究レベルには、学校や教員によって差がある。

（解決策） 従前のICT支援員や活用研修会の一層の拡充に加えて、民間の活用サポートサービスの利用も検討し、教員全体の活用力の底上げを図る。

イ（課題） タブレット端末の持ち帰り学習や課外活動での利用はまだ不十分なレベルにある。

（解決策） 積極利用の下支えとなるルールをつくり、学校及び保護者へ周知、活用の促進を図る。

ウ（課題） 経年劣化によるタブレットの故障も年々増加し、修理や予備機運用による対処では限界がきている。

(解決策) 端末のバッテリーの長寿命化や堅牢性の確保が図られた端末の更新を行う。

エ (課題) 双方向的で同時多数の情報の送受信が今後急激に増加することが見込まれるなか、推奨帯域に到達していない学校が多数ある。

(解決策) ネットワークアセスメントの結果を踏まえ、ネットワーク環境の改善を行う。

3 1人1台端末の利活用方策

ネットワーク環境の見直しとともに十分な予備機を含めた端末の適時更新により、引き続き1人1台端末による学習環境を整えていく。

(1) 1人1台端末の積極的活用

I C T支援員を継続配置し、各種研修会の開催や民間の活用サポートサービスの利用など教員の活用力を向上する機会を設け、教員の1人1台端末の活用支援を行う。

1人1台端末の家庭への持ち帰りや課外活動での利用を本格化させるべく、令和6年度末には、タブレットルールの改正を行った。充電方法や公共施設等での利用を拡充したことで、今後の利用機会のさらなる増加を図る。

(2) 「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実

当市ではG I G AスクールⅠ期から「大船渡市 情報活用能力体系表」を作成しており、具体的な端末活用スキル習得の目標設定をしている。

大船渡市における情報活用能力体系表について

⇨ : 必須活用

➡ : 努力目標

資質	内容	目標	低学年	中学年	高学年	中学校
知識・技能	1 情報と情報技術を適切に活用するための知識と技能	スキル	端末の電源のオンオフができる。			
			端末のログインができる。			
			端末のカメラ機能を使って撮影ができる。			
			学習アプリケーションにログインすることができる。			
			QRコードリーダーを読み取ることができる。			
			ロイロノートのアプリケーションにログインすることができる。			
	2 問題解決・探究における情報活用方法の理解	スキル	キーボードを使って文字入力（ローマ字・カナ字）ができる。	➡		
			撮影した写真や作成した資料などの保管場所が理解できている。	➡		
			ロイロノートで、先生からの資料配付や連絡を受け取り確認や回答をすることができる。	➡		
			ロイロノートで、シンキングツールを用途に応じて自分の考えをまとめることができる。	➡		
	3 情報モラル・情報セキュリティなどについての理解	モラル	一つの資料を複数の友だち同士で作成することができる。	➡		
			ICT機器等を使う際は、守らなければならないルールがあることを理解している。			
			発信する情報には責任が伴うことを理解している。	➡		
			情報をもたらす弊害について理解することができる。	➡		
			自分たちで情報や情報機器の扱いについてのきまりを考えることができる。	➡		

思考力・判断力・表現力	1 問題解決・探究における情報を活用する力（プログラミング的思考・情報モラル・情報セキュリティを含む）	収集・表現	目的や意図に応じて検索ができる。				
			目的や意図に応じてプレゼンテーション資料を作成することができる。				
			一つの資料を複数の友だちで作成し、分かりやすく発表することができる。				
		プログラミング	対象物を意図したように動かすための方法を順序立てて考えることができる。				
学びに向かう力・人間性等	1 問題解決・探究における情報活用態度	意欲	ルールを守って端末を活用しようとする。				
			身の回りの情報機器を積極的に利用しながら課題の解決を図ろうとする。				
		個別最適化	自分の課題に応じたA Iドリル学習に取り組み、課題を解決することができる。				
	2 情報モラル・情報セキュリティなどについての態度		課題に応じて自分の記録を残しながら、A Iドリル学習に取り組むことができる。				

G I G AスクールⅡ期では、①児童生徒が自分で調べる場面、②児童生徒が自分の考えをまとめ発表・表現する場面、③教員と児童生徒がやりとりする場面、④児童生徒同士がやりとりする場面、⑤児童生徒が自分の特性や理解度・進度に合わせて課題に取り組む場面のいずれにおいても、現在の体系表を活用し、情報活用能力の育成に努めていく。

(3) 学びの保障

G I G AスクールⅡ期においては、更に安定した通信環境を前提に機能の拡充した端末を整備し、学びの保障につなげていく。

具体的には、外国人就学の場面における翻訳機能の活用や、アクセシビリティの側面に注目し、特別な支援を要する児童生徒についても、話ことばの文字起こし、タッチペンの文字補正などの機能の活用方法を検討し、最適な学びの形を目指す。また、児童生徒の教育相談や不登校児童生徒に対する授業参加支援として、オンライン会議システムやチャットツールによる対話や授業参加の方法を検討し、対面や登校の負担へ配慮が必要な児童生徒の学びの選択肢を広げていく。